



鴻文会報

第 14 号
発行・鴻文会
〒73 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話(0839)22-6111
(内線) 808
郵便振替口座
下関0-15902

万物流転

和田敏英
(英米文学・文理第一回卒)

ギリシャの昔、哲人ヘラクレイトスは「万物は流転す」(パンタ・レイ)と言った。いかなる時代も動いて止まぬ過渡期にはちがいがあまいるまいが、この数年間の世界の流れを見てみると、誰しも万物流転の感を一層深くするのではなからうか。

五年前の秋、アツという間にベルリンの壁が崩壊し、雪崩れを打つように旧東独の瓦解、旧ソ連の消滅が続いた。不倶戴天の敵同士と想われたイスラエルとアラブ世界、IRAとイギリス政府との間に和平交渉が動き始めたかと思えば、他方で湾岸戦争、ユーゴの内戦、アフリカでの民族紛争の続発など、目まぐるしい世界の変転に驚きを禁じ得ない。

昨今の国内情勢も負けず劣らず流動的といえよう。自社連立の政権、自衛隊海外派遣、コメの自由化、税制や選挙制度の改革、政党の離合集散、いずれを取ってみても一昔前には想像し難いことばかりであろう。

一介の老英語教師の我が身にも変化が訪れた。去る三月、山口大学を定年退職し、いま小野田市にある東京理科大学に勤めているが、国際化時代における英語教育らしきものの洗礼を受けている。つまり、視聴覚機器による日常会話のリスニング、ビジネス英語、そしてエコロジー評論の担当など、これまでの春風駘蕩たる英文学教師とは縁遠くなったのである。いわば私の世界も激動の波に襲われて、匹夫の嘆きを嘆いているに過ぎないのかもしれない。

いつの世も変化し続ける。安閑として惰眠をむさぼってはおれまい。万物流転とはいえ、願わくは虚無に至る道を歩まず、よき伝統の上に進歩を夢見る革新を……「太ったソクラテス」を願うのにも似て、これはいささか楽観的であろうか。

マッカーサー流にお別れをしよう。「老兵は死なず、消え去るのみ。」

(東京理科大学山口短大教授)

「旧制山口高等学校開校75周年記念大会開かれる」

平成六年九月十五日、旧制山高75周年記念大会が、旧校舍跡の山口市糸米の県立山口高校体育館で開かれ、全国から恩師・同窓生と御家族約七百人が集まった。記念式典は、下瀬育郎記念行事実行委員長長の歓迎あいさつに始まり、小澤太郎鴻南会会長の式辞、続いて田中晃(元山口大学学長)会員の「檄」が発せられた。その末尾において、戦後旧制高校廃止のことに触れたのち、「幸いにわが山口高等学校は山口大学文学部として再生し、文学部は更に発展して人文学部並に理学部となり、山口大学七学部のうち最も基礎的なる学問分野を担当するに至りた。

交流とがありました。最後にになりましたが総会を設定してくださいました広島支部の方々には厚くお礼申し上げます。

国文科

一九九四年度の国文科同窓会は、八月二十日に防府駅前の中谷で開催した。出席は十名で寂しいかぎりの人数だったが、新装なったJR防府駅などを話題に大いに盛り上がった。会員ご持参のセピア色のなつかしい写真。老眼に苦労しながら必死に方々の若かりし頃の面影を探した。

各研究室同窓会紹介

社会学系

平成六年度第十七回同窓会総会は、六月四日午後五時より広島ステーションホテルで行われました。総会が広島で開催されたのは昭和五十七年以来十二年ぶり、広島・山口両県在住者を中心に三十一名の出席がありました。小谷典子先生、横田尚俊先生、高橋征仁先生の現教官と、旧教官の近況敬一先生の四人先生方も出席されました。

今回の総会では、人文学部の改組に伴

い社会学・社会心理学・社会人類学の三講座で社会情報論コースを構成する(つまり、「社会学」の看板がおろされる)のを機に、「社会学同窓会」に何か名称をつけようという大きな議題つきでした。同窓会報にその旨を掲載したところ、総会出欠用の返信はがきで同窓生からさまざま名称案がよせられました。総会当日では決定することができず、今に至っては決まりました(その後の経緯については次号の同窓会報に掲載する予定です)。

英語学・英米文学

和田・ブルース両先生御退官記念行事

英語学・英米文学講座では、平成六年三月を以て和田敏英先生の定年御退官と共に、二十年にわたり御指導いただいた

寮歌、学生歌の古い録音テープも聞いた。児童における文部省唱歌のごとく、久しぶりに口ずさんだ。意外なことに歌詞が苦もなくよみがえってくる。来年度は山口市で夏に開くことになった。シーンも色々でよいとの意見もあり、この同窓会気ままに波間をただよってそれはまたそれで結構かと思う。余裕のある会費の貯えで、母校に植樹をという元気な意見もあり。

アレクサンダー・ブルース先生も御退職、英国へ御帰国のこととなりました。ついでに平成六年二月十九日(土)午後三時より、山口大学会館ホールで記念講演会、引き続き会館レストランで懇親会を催しました。和田先生は「文学研究ということ」、ブルース先生は「20 Years On, Older and Wiser」と題しての御講演で、さすがに含蓄のある豊かな内容に教官、卒業生、在学生等百二十余の聴講者は深い感銘を覚えました。講演終了後花束贈呈、記念撮影があつて、懇親会に移り、教え子の方々より思い出のスピーチがあり、大塚博久鴻文会会長はじめ祝電の披露のち在校生よりの記念品贈呈があり、両先生のご挨拶をいただき、万歳三唱を以てお開きとなりました。

(S・T)



平成五年度

人文学部卒業生・

大学院修了生進路状況

人文学科

建設業
大和ハウス工業、日本乾溜工業、山口セキスイハイム

製造業
タカキベーカーリー、カイタック、タカラ、ファーストリテーリング、ライフ企画、赤坂印刷、ノエビア、セガ・エンター・プライゼス

卸・小売業
明治屋産業、九州花王販売、森光商店、松岡、イズミ、浅井商店、ミヤコ、やまと、いなご、Mr.Max、日産プリン

金融・保険業
ス福岡販売、イトヨーカ堂

安田生命保険、日本生命保険、東京海上火災保険

運輸・通信業
九州旅客鉄道

教員
福岡県教員、大分県教員、山口大学
新聞・テレビ・出版業
サンデー山口、中央出版、ゼンリン、ベリかん社、ぎょうせい、九州朝日放送

広告・観光・サービス業
ロイヤル、英進館、チガミ地上税理士事務所、建設技術研究所、山口県酪農業協同組合、岡山コーポレーション

リンガーハット、博多ベイオリエンタルホテル&リゾート、朝日エージェンシー、サンレー、北九州予備校、キョウエイADインターナショナル、四国ユーザーサービス

国家公務員
名古屋入国管理局

地方公務員
山口県、香川県、直方市、山口市、安芸市、北九州市、川副町、大村市、綾部市、筑後市、戸畑消防署、加東郡教育委員会

その他
雇用促進事業団

語学文学科

建設業
タカオ

製造業
エスケイ、キリンシーグラム、大村印刷、矢野特殊自動車、タイガー魔法瓶

卸・小売業
小倉興産、銀座マギー、コープやまぐち、フジ、シュテルン福岡、大阪三貴

金融・保険業
プロミス、アコム、日本生命保険、東京海上火災保険、第一生命保険、住友生命保険

入学年度別学生数

学 科(専攻)	性別	6	5	4	3	2	元	63	62	計
		学 部	男	50	45	2				
人文社会学科	女	61	62							123
	計	111	107	2						220
言語文化学科	男	36	22		1					59
	女	69	77	1						147
人文学科	計	105	99	1	1					206
	男			31	50	17	5	3	2	108
語学文学科	女			77	57	1	2	1		138
	計			108	107	18	7	4	2	246
合 計	男			18	15	11	5			49
	女			89	68	3	1			161
部	計			107	83	14	6			210
	男	86	67	51	66	28	10	3	2	313
大 学	女	130	139	167	125	4	3	1		569
	計	216	206	218	191	32	13	4	2	882
院	男	6	4	1						11
	女	2	2	1						5
地 域 文 化 専 攻	計	8	6	1						16
	男	3	5	1						9
言 語 文 化 専 攻	女	3	3							6
	計	6	8	1						15
合 計	男	9	9	2						20
	女	5	5	1						11
	計	14	14	3						31

証券・不動産業
山一證券

運輸・通信業
日本通運、宮崎交通

教員
宮崎県教員、山口県教員、愛媛県教員、長崎県教員、島根県教員、福岡舞鶴高校

新聞・テレビ・出版業
中央出版、ひろしまタウン情報、福井テレビ開発、テレビ山口

広告・観光・サービス業
総合警備保障、フェニックスリゾート、ホテルサンルート広島、チガミ地上税理士事務所、ベガサスアカデミー、柳

大学院人文科学研究科

井市農業協同組合、向学社、宮崎交通観光、JTBトラベランド、阪急交通社、グローバルユースビュロー、読売旅行

国家公務員
山口大学附属図書館、長崎地方法務局、山口地方法務局、中国郵政局

地方公務員
山口県、徳山市、尾道市、府中市、内子町、倉吉市、山口市、八幡浜市

(株)字部時報社、社会福祉法人清光園

私の中の山大・山口

随流三十年

権代 鉄也

(英米文学・文理第十四回卒)

学生時代から三十年、当時と比べて何か変化したものがあるか。

学生時代、山口市の郊外小鯖の雲道人の自宅へ出入りをしてきた。大学で学ぶことは異質なものであったが、老師から教わったものは多かった。《文化史的実力》についてマンツーマンで講義を聞いた。老師と親交の深かった西田幾太郎の直筆や老師の弟子鈴木大拙の手紙、書物や美術館でしかお目にかかれない有名な人たちの作品や書、写真などを見せてもらった。また、中国の書家黄山谷の書を呑み込んでこい、そうすれば全て分かるよと、なぞの言葉をもらったりした。

私は当時、生への不安を感じていて、いろいろな書物を読んだり、音楽を聴いたりもしていた。また、当時英文学を講じておられたアメリカ人ストライクさんが関心を示されたが、夜中に見た夢を記述して、夢からも自分という存在を直につかもうとしていた。まさに心の休まらぬ修羅道であった。

随流三十年。あのころと大きく違うのは、自分が齢を着実に重ね、子供達は家を離れ、孫を持つ身になったことだ。そ

して若いころにはただ憧がれに過ぎなかった死を、直接解決しなければならぬ年を迎えている。孫を残すことによって微かに死を解決しような気になることがある。また、少しは自己とも親しめるようになった。時に諦観らしき景色を自分に見て欲ぶ。しかし修羅道は依然続いている。その意味において当時と変わりは無いと言えよう。

御退官の和田敏英先生には、この間、長いお付き合いをさせてもらってきた。学生時代、シニカルに見えた先生も、今やすっかり好々爺に見える。先生が変わられたのか、こちらが変わったのか。長い御健勝を祈るや切なり。

Blest, who can unconcern'dly find
Hours, days, and years slide soft
away (Pope)

(山口県立華陵高等学校教頭)

嗚呼！

「タクアン二切れ 2Kカロリ」

藤田和裕

(国文学・文理第十七回卒)

結婚披露宴に出る。忘年会に出る。豪華で贅沢な料理が出される。あまりに数多くの料理、豪華なメニューに戸惑いを覚える。学生時代の食事の風景が思い出される。

入学式の前日、鳳陽寮の「北寮上6」室に入寮したが、この寮は木造二階建の古い建物で、消防署からは「火が出たら消そうなどと思わず、ひたすら逃げろ」

と言われた。

寮の食事は、食費に対してそれ以上でも、それ以下でもなかったようだ。ある日、食事時間外に棚に残されていた夕食をとった。アルミの皿に半身のサンマ、アルミの椀に冷えたご飯とタクアン、それだけである。時間外には汁ものは残さないものである。この日も時間内に食事をすれば、たぶんブタ汁などがついていないものと思われるが、いまさらどうしようもない。豊かとはいえなかったが、郷里での夕食のことなどに思いを馳せていた。

寮での食事は、食事の内容とそのカロリについて寮の栄養士さんが計算され、食堂の黒板に毎食ごとに書き出されていた。舌づらのムニエル350Kカロリ・スープ148Kカロリ・ご飯200Kカロリ 計698Kカロリなどと。どうも若い学生にはカロリ不足のようだ。このカロリ不足に、寮の栄養士のお姉さんが大いに悩んだ。「困る、困る。カロリ不足を何とかしなくては。」書き記された品名とカロリの最後に、凄絶な決意のもとに1行、お姉さんによって書き加えられた。「タクアン二切れ2Kカロリ」と。「限られた食費でやりくりするんだから、1カロリでも増やさないと」と言った彼女の真剣な瞳と口調を思い出し、仕事に対する責任感と執念、寮生に対するしみじみとした愛情を感じる。

結婚披露宴などで「タクアン二切れ2Kカロリ」を思い出すたびに、目の前、半分かそれ以上が「生ゴミ」となるであろう豪華な料理の数々を眺め、この

ままでは日本のゆく先も長くないなあ、などと考えつつ、ひたすら酒を酌み交わしているのです。

(長崎県教育庁文化課)

さとうカエデの……

永富(旧姓兼行) けし

(英語学英米文学・文理第二十七回卒)

さとうカエデの葉の紅がその色を極め、自然の摂理に従って枝を離れる。その散り敷く道を行きながら、山口は季節が色濃く映る街だと、つくづく思う。時は流れ、住む人が移ろい、街の景色は変わった。吹く風は歳月を経てなお同じ季節の香りを含み、中也不らずとも、おまえは何をしてきたのかと、自分に問いかけてみたくなる。

山大門を入ると、学内の樹木は皆どれも太くたくましく成長し、時が経つとは、こういうことかと圧倒される。旧文学部の正面に立ち、四階の窓を見上げると、記憶の底から鮮やかに甦えるのは、和田敏英先生の朗々とした英文朗読の声。そこでシェークスピアを読み、ジェイン・オースティンを読み、英文学史を学んだ。アカデミズムとはこういうものかと思わせる、学問に対する厳しさの漂った先生の鋭い眼ざしと、今想えば粋ともいえる軽妙なアイロニーは、講義にも演習にも適度な緊張感を生んだ。それは、真偽の程は確かではないが英国にまつわるものらしいと噂されたい品の良い濃い紫のシャ

ツの印象と共に、いわば神話的風景となつて、私達の中に今も在る。当時、おそろく先生が語って下さった、文学作品の奥にあるもの、人間の深淵や人生の機微については、もはや、その一つ一つは忘れ河を渡ってしまった。しかし、私のような不肖の弟子でさえ、諸々の事が know edge から wisdom の域に達する階段を今ようやく上りかけているのではと申し上げたら、先生は何と答えて下さるだろう。

今年三月をもって、和田先生は山大を退官されたが、今も、山大名誉教授として、英文学三昧の日々を白石のご自宅ですごされている。よって、私たちは一人山口を歩く時もリップ・ヴァン・ウィンクルの気持ちを味わわないで済む。文理学部最後の三期生が寄って結んだ三期会の一人として、和田先生を共に訪れる日の近からんことを希いつつ、又、ご退官記念の会に集えなかつた者の熱い想いを代弁したく、寄稿させていただいた。

もう五年近くも……

大坂(旧姓池本)さゆり
(ドイツ語学ドイツ文学・
人文第九回卒)

もう五年近くも前のことになる。卒業式の日の夕刻であった。私たち独文の卒業生は、新築の岡光先生のお宅に招いていただいた。吹抜けのある白い素敵な洋館で、奥様の美味しいお料理をごちそう

になり、幸せな時間を過ごした。そのうちクラブやサークルの追い出しコンパに行くために二、三人は立ち上がったが、その他の三、四人はいつまでも腰を上げずに、奥様やお子さん達がお休みになるために二階に上がられてからも、『舞姫』のビデオを見せていただいたり、お酒をごちそうになったりしているうち、そのまま先生のお宅で明かしてしまつた。まったく恥ずかしい、それと同時に大変懐かしい思い出である。それはもう二度とな

い、学生時代最後の貴重な思い出である。今私は神戸の大学院に通っている。こは六甲山の中腹にあり、眺めはすばらしい。その夜景はなかなかのものだが、それは心を落ち着けるにはあまりに人工的である。その空には星はほとんど見えない。山口のきれいな星空を思い出すたび、本当に懐かしい。このところ土らしい土を踏んでいない。ここでは水も空気もよどみ、太陽の光すら濃厚なスモッグに遮られているようで鈍いのだ。神戸に住んでいると、私たちにはやはり自然は大切であることを実感する。それはまず気持ちを和ませる。そしてその大切さは健康や精神に尽きるものではないように思う。

学生時代、つまり山口にいた頃は、いろんな意味で守られていた。例えば、岡光先生は、私たち学生が専門に上がってからは時々個人面談を下された。それは確か学期初めなどに一人ずつ先生の研究室で五分か十分間お話をすると、簡単なものだったが、その際先生は、勉強のことだけでなく家のことや生活のことについても必ず尋ねて下さった。それ



は私たち学生の一切を引きうけて下さるという気持ちと、それが出来るお人柄がなければ、なかなか難しいということはいうまでもない。また、多くの時間を共有した友人たちはいつもなにかしら力になってくれたし、支えられているという安心から勇気となってくれていた。こちらではそうした友人というものはなかなか出来にくいものだ。そこにはもちろん生活環境の違いがあると思う。

われているようなせわしなさに纏いつかれているように思うのだ。それは単純に仕事の量の問題だけではない。人や自然、その土地の雰囲気のためだろうかと思う。山口の地とそこで出会った人々は、その思い出とともに、今まで私を支えてきてくれたように、これからも支え続けてくれるであろう。

(神戸大学文化学研究所大学院生)



会費未納の方はなにとぞお納め下さいますようお願い致します。
終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座
下関〇一五九〇二
加入者名 鴻文会

となったとき、つねづね高知県出身の先輩が、「中心」に身を置く人々の想像力の欠如を語っていたことの意味が、我が事としてわかったような気がしました。知らぬ間に勝手な「地方」像を描いていて、現実が見えていなかったわけですが、過去の思想の現実性をめぐってあれこれ考えるのをいわば商売にしている私にとっては、現実をまじめに受けとめることが課題として与えられたものといってもいいでしょう。

実際に山口で暮らしてみて、私が山口の現実にとれほど触れ得ているかとなると、いまだに心許ないところです。「住めば都」という月並みな感想を抱くこともありますが、それは住む人である私の都合からする一方的な見方である点で、やはり自己中心性を脱却できていないでしょう。現実認識への道はなかなか険しいようです。

環境について特筆すべき変化は、関東平野に育った私にとって視野に入る山といえは遙かなたの秩父連山とか富士山しかなかったのが、今や自宅の窓からすぐそこに姫山が見えることです。また、山口の夏は暑いぞと脅かされていたのですが、今年の記録的な猛暑を無事乗り切ることができたのだから、これは耐性ができたといっているでしょう。そう慢心しているうちに、もう冬。月日が経つのはほんとうに早いと、これまた月並みな感想で締め括らせていただきます。

山口大学に赴任して

池園 宏
比較言語文化・英米文学

約一年前、山口大学にご採用いただくという知らせを伺った時、「専門の授業」を受け持つことへの喜びと重圧を痛感したことを思い出します。こちらに赴任する前は、福岡にある短大の英文科で四年間教鞭を執っていました。英文科といってもその内容は教養英語の域を出るが出ないかという範囲のものでしたので、自分の専門領域の抽い知識を幾分かでも学生に還元したいと考えていた私は、時として自らの立場に当惑を覚え、大学で教えることの意味そのものを自問することもありました。そのような折にこちらの人文学部の話を伺い、強く惹かれるものを感じたのでした。

私の専門分野は英文学です。とはいっても初めから熱烈な文学青年だったわけではありません。もとの英語に携わる職業に就きたいと考えていたのに加えて子供好きだったので、英語教師になるつもりで大学は教育学部を選びました。その後様々な経緯により英文学の魅力に惹かれ、大学院では文学研究科に入って本格的に勉強を始めましたが、やればやるほどそれまで学んできた教育学との専門分野の違いに戸惑うことになりました。御存知のように学校教育というのは、生徒という生きた主体に接するという意味で、非常に現実的なものであり、そこに喜びがあると言えます。これに対しある意味

で文学ほど現実から遊離していると一般に思われている学問もありません。例外はあるでしょうが、現実には経験できない架空の世界に没入することに文学の醍醐味があるとはよく言われることです。また俗に文学は虚学、社会のニーズにすぐには応えられぬ学問だという声も時々耳にします。事実、大学生になりたての頃は自分もそう考えていた節がありますし、また院生の頃アルバイト先の塾の経営者から「何で文学なんてやってるの？それって現実逃避じゃないの？」と痛いところを突かれ、恥ずかしながらも反論できなかったという苦い経験もあります。教育学から文学に進路を変更し、自分のやっていた学問に十分満足感を感じながらも、どこかでこの文学と現実との接点という問題が絶えず頭から離れず今に至っています。英文学の世界に好んで没頭しながらも、どこかで常に後込みする感のある自分の姿にある種のもどかしさを感じさせるのです。

それでも自分で好き勝手に本を読んでいる分にはまだ良いのですが、こうして教師の立場で英文学の授業をする立場に立つと、ますますこの問題は大きなものとなります。授業を受けた学生が、英文学は非常に面白いものなのだと思えば教師の責務の一端は遂げられたことになるのでしようが、常に冷めた眼で見つめる別の自己がいてそれを邪魔しているのではないか、それで本当に良い教育的効果を得られるのかどうか、などと考える自分にふと気づくことがあります。勿論それはそれで文学を客観的な視点で冷静に見つめられるという利点もあるのだ

とも言えるのですが。文当は確かにすぐ役立つものではないし、その意味ではすぐに結果を求める風潮のある（と言われ）最近の学生の授業への動機付けにも深く関わってくる問題です。文学をいかに教育の中に生かすかということは、いささか大げさで私の手には余りある命題であり、そんなことを考える暇があったらもっと自分の勉強をした方がかえって学生のためになると思いいながら通らっしゃることと思います。またその通りだと自分でも思います。しかしこの問題は私にとってはただでさえ責任の重い英文学の専門教育をする際には避けて通れないもののような気がしています。教育学出身の悲しい習性なのでしょうか。

甚だとりとめもないナイーブなことばかり述べてきましたが、以上のようなことが山口大学に赴任する際に考え、現在も日々感じていることです。専門教育に携わることへの喜びを実感しつつ、そこに生ずる責任と不安を良い意味でのプレッシャーに変えてこれからも努力したいと考えております。教える方面のことばかり述べてきましたが、勿論自分の研究も疎かにしないよう日々研鑽を積み重ねていきたいと思っております。至らぬ点多く御迷惑をおかけすることも多々あるかとと思いますが、どうぞよろしくお願ひ致します。





研究室便り
西洋史学

現在西洋史学研究室には、院生が一名、学部の四年生が九名、三年生が十二名おります。男女の割合はほぼ半々で、バランスがとれております。学生の気質は昔とかなり変わってきているようで、アクも強いが鬱勃たる闘志の持ち主でもあるといったタイプの人が減ってきているように思われます。

すでにご存知のことと思いますが、コース制の導入に伴い、歴史学を専攻する二年生は「地域歴史文化論コース」(定員三五名)に所属しております。これら二年生は三年生になって各教官に(講座にはなく)つくこととなりますが、その割り振りが決定するのは来年(九五年)の三月になります。今の三、四年生が卒業してしまえば「西洋史講座」も完全に消えてしましますが、学生の研究室(溜まり場)はそのままですし、二名の教官(尼川と小原講師)の共通の演習も続けていくつもりですので、これまでの西洋史学研究室が全く分裂してしまうということにはならないと思います。これまで毎年在校生が準備してきたOB会(十一月ごろ)も続行される見通しです。

小原豊志先生は、スポーツのほうもなかなかのようですが、英書講読を毎回三〇分から一時間も延長して授業されたり、「卒業論文報告集」作成を提案されるなど、学生を熱心に指導され、研究室の雰囲気を引き締めておられます。渡辺眞治先生は七十五歳になられますがお元気で、今年度も史学概論の授業を担当していただいております。山口房司先生は今年のOB会にはいらっしやいませんでしたが、お元気で天理大学で教鞭をとっておられ

る御様子です。

ついながら、九五年五月十三日(土)と十四日(日)には、山口大学におきまして日本西洋史学会第四五回大会が開催されます。現在、山口大学の西洋史学関係の教官は、現教養部長の古賀秀男先生を代表として、大会の準備を進めております。大会には多数の著名な学者が参加されます。この大会がきっかけに山口で開催されるのは数十年先のことと思われる。西洋史学に興味をお持ちのかたは、是非御参加下さいませ。お問い合わせは、尼川(山口大学一内線八二三、自宅一山口(三三)〇五三〇)まで。

(尼川創二教授)

言語情報処理学

わが言語情報処理学研究室は、発足以来一年半という若い研究室です。従って、卒業生はまだ出していません。四年生もおりません。教官は、発足当初は、専任なしの非常勤(鶴岡)のみでしたが、昨年(平成五年)十月一日に鶴岡が教授として着任、そして今年の十一月十四日にはイギリスから、ジョン・フリリップス助教授を迎えました。

学生は、今年から学制が変わって、二年生は、大講座の言語情報コースに所属するので、今の所は三年生の七人と、留学生(研究生)一人だけです。大講座になって、コース説明会やコンパ、歓迎会などの行事は、言語学の山本教授、平野助教授、乾講師や、言語学の学生さんたちとなかよくやっています



(山本教授は学部長でもあり、英語学のほうも兼ねておられます)。

言語情報処理学研究室では、言語に関する情報処理を行っています。鶴岡は、パソコンを使って日本語のデータベースを作り、言語研究に利用しています。言語の分析にはBASICというプログラム言語を使ってプログラムを組み、処理しています。学生たちにもBASICのプログラミングを教えています。ジョン助教授は、まだ着任したてですが、機械翻訳(自動翻訳)の専門家、ワークステーション(ユニックスを使う、本格的な言語情報処理をやることになっていま

す。プログラム言語も、LISPやPROLOGといった、高級なものを駆使するというところで、これからのジョン助教の研究・教育には大いに期待がかかっています。

最後に、言語情報処理学研究室の将来の展望について、すこし触れたいと思います。今までの言語情報処理は、主に工学系の学問でしたが、これからは、人文系の学生・研究者が世の中から求められるようになるものと思われまます。

(鶴岡昭夫教授)



随想

道なお遠し

武宮 諦

八十年人生と言われている今日でも、還暦とか停年と言ったそれぞれの節目には、何となく身辺慌ただしくなる。かといって、今更駆けだしてみても、それはそう長くは続かない。そのことは、身に沁みて感じている。だから心急かれないが、自分歩調で進むより他ない。

わたしがプラトンに幾らか本気で取り組もうと思っていたところ、そのために、も絶えずアリストテレスを傍らにおいて勉強すべきことを教えられた。哲学といわず学問全体が、ある意味で先人の教え



を継承しながらも、それとの葛藤、批判的超克の歴史であることは、例えばアリストテレスの有名な次の言葉からも知られる。

「真理も親しき人々も、共にわれわれにとつて愛すべきものではあるが、真理に対してより多く尊敬を払うことこそ敬虔な態度なのである。」(『ニコマコス倫理学』一巻六章)

彼はこのような書き出しで、その師プラトンの善のアイデアに批判の鋒先を向けるのである。勿論その批判の妥当性についてここで論じようとは思わない。わたしが注目したいのは、真理に対して忠実であろうとする、敬虔なとまで言われるこの彼の態度が、その学問全体の支柱になつていてということである。彼は真理を望見していたがゆえに、愛すべき親しき人にも批判的態度をとらざるを得なかつたのである。

このような境位の一端は、その思想の晦渋さをもつて知られ、「暗き人」とさえ渾名されたヘラクレイトスを通して窺うことができようか。彼の断片は、初期の哲学者の中では比較的数多く残されているが、その一つの理由は、その言葉の持つ人の心を打つ力の故であろう。彼は博識と智慧とを厳格に区別し、万物に共通なロゴスに聴いて、「万物は一なり」と覚(サト)らなければ、いかに博識であつても目開きの盲者(メイシ)、聞けども聴こえぬ聾者(ツンボ)に等しいと論じた。それは独り生死巖頭に立つような、世間とは隔絶された孤絶の境地ではなからうか。事実、彼は陰遁の生活を送つたと伝えられている。しかしその半面、あるとき彼の許を尋ねた友人を招き入れて、燃えている火を指差しながら、「お入り! ここにも神がいる。」と言つたということもよく知られている。そこに内的に豊かな世界の開かれていたことが察知されよう。

アリストテレスが望見した真理、ヘラクレイトスの確信したロゴス乃至神とは一体何であつたのか。そこに行き着くまでの道には「無駄話」とも見え「空虚空論」と罵られるような高邁な思索が要求されるであろうが、その究極においては、千万言を費やしてもなお隔靴搔痒の感を免れないようなものが拓けていたのである。もしその体験を語るとするならば、それはプラトンが美のアイデアを語るときに、恋(エロース)の階梯を登りつめて、「突然まざまざと目にする」と言わなければならなかつたような体験であつたらう。彼らが望見し目にしたものは、もの

が美しく結晶したり結実する場合の核に相当するものであつたことだけは確かなように思われる。あらゆる学問の基底には、こうした核への方向がなければならぬ筈であり、批判的吟味ということも、そのかぎりて意味を持つてであろう。さきに触れたヘラクレイトスも「知を愛し求めるものは、実に実に多くのことを探求しなければならぬ」と語つていた。これは学問の細分化を予示するものとも見られようが、それは飽く迄真の智慧への内的必然性に裏打ちされなければ、自らの意味と価値とを見失ひ、糸の切れた風のように彷徨せざるを得ないであろう。

近來、大学でも「時代の要請に應える」ため種々の改革が声高に叫ばれている。ソクラテスの生きていた時代にそのようなものとして最も歓迎されたのは、他ならぬソフィストの弁論術であつた。それに真つ向から挑戦し、その反面を剥き出して正体を暴いたのは、何時も靴作りの術や機織り術を例に出しながら、自らの魂のよくなることに努めべきことを勧めていたソクラテスであつた。「時代の要請」という正体不明の言葉に性急に應えることよりも、学問の持つ真理への要請にどれほど忠実であるかが、今こそ問われているように思える。それが真に時代を越えてそれぞれの時代に新たな展望を開く大道であるであろうからである。

西田幾多郎は、「哲学は八十までが勝負だ」といって、自らも思索に励み、また後進の者を諭していたと聞いたことがある。今のわたしはそれが一つの支えになつていて。そこへの道がいかに険しくなつていても。(人間学・哲学教授)

平成五年度事業報告

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1. 鴻文会第四回総会 (8月17日) | 5. 第16回役員会 (7月24日) |
| 2. 1993年版鴻文会会員名簿発行 | 6. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 |
| 3. 「鴻文会会報第13号」発行 (12月24日) | (5月26日) |
| 4. 第15回役員会 (5月29日) | 7. その他 |

平成五年度決算

収入の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
繰越金	2,515,385円	2,515,385円	0円	
会費収入	1,200,000	1,120,000	△ 80,000	5,000円×233人分 平成五年度入学者221人
名簿収入	750,000	496,500	△ 253,500	331人分 (448冊販売)
雑収入	200,000	110,277	△ 89,723	証券利子、預金利子、寄付金
合計	4,665,385	4,242,162	△ 423,223	

支出の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
会議費	200,000円	72,870円	△ 127,130円	役員会 (2回)、その他
印刷費	220,000	342,063	122,063	会報印刷費 (3,900部) ポスター・チラシ
郵送費	250,000	340,422	90,422	総会の案内、会報郵送料
総会費	200,000	94,302	△ 105,698	総会講師接待、準備費
事務費	200,000	234,686	34,686	会報発送宛名書きアルバイト
				幹事謝金、事務手伝い謝金
				文具、フィルム・現像・プリント代
名簿作成費	3,050,000	1,896,098	△ 1,153,902	別表参照
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
電報代	0	1,472	1,472	弔電・霜仁会祝電
その他	0	10,000	10,000	川崎さん記念品
予備費	445,385	0	△ 445,385	
合計	4,665,385	3,091,913	△ 1,573,385	

特別会計

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
積立金	4,100,000円	4,100,000円	0円	中期国債ファンド、定期貯金
利子収入	3,500	3,540	40	利子分は雑収入として一般会計に組み込んだ
合計	4,103,500	4,103,540	40	

別表：会員名簿作成費内訳

	当初予算額	決算額
印刷費	2,050,000円	1,297,800円
通信・発送費	593,000	453,298
アルバイト	400,000	145,000
雑費	7,000	0
計	3,050,000円	1,896,098円

平成6年6月18日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監事 米屋 廣 志 印
芳 西 靖 幸 印

平成六年度事業計画

1. 第17回役員会(6月18日)
2. 「鴻文会会報第14号」発行
3. 山口支部結成準備
4. 鴻南会75周年記念大会への対応
5. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会
6. その他

平成六年度予算

収入の部

科目	6年度予算額	5年度予算額	比較増減	摘要
繰越金	1,146,709円	2,515,385円	△1,368,676円	
会費収入	1,200,000	1,200,000	0	5,000円×240人分 平成6年度入学者242人
名簿収入	180,000	750,000	△570,000	1,500円×120部
雑収入	10,000	200,000	△190,000	預金利子
合計	2,536,709	4,665,385	△2,128,676	

支出の部

科目	6年度予算額	5年度予算額	比較増減	摘要
会議費	100,000円	200,000円	△100,000円	役員会、その他
印刷費	220,000	220,000	0	会報印刷費(3,900部)
郵送費	300,000	250,000	50,000	葉書講入、会報郵送料 通信連絡費
総会費	0	200,000	△200,000	
事務費	360,000	200,000	160,000	会報発送などアルバイト謝金(12万円) 幹事謝金、事務手伝い謝金(15万円) 消耗品費(3万円)
名簿作成費	0	3,050,000	△3,050,000	別表参照
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
予備費	456,709	445,385	11,324	
合計	1,536,709	4,665,385	△3,128,676	

特別会計

科目	6年度予算額	5年度予算額	比較増減	摘要
積立金	4,103,540円	4,100,000円	3,540円	中期国債ファンド、定期貯金
積立金・新規	1,000,000		1,000,000	
利子収入	15,000	3,500	11,500	
合計	4,103,500	4,103,540	1,015,040	

山口点描

緑いっばいの

アメニティロード

「山大通り」

大学の正門前から榎野川までの全長約九百メートルの、通称「山大通り」が昨年、面目を一新した。従来十二メートルだった幅員は二十〜二十四メートルに拡幅され、幅員三メートルで二車線の車道の外側には二・二五メートルの停車帯が設けられ、一般車両の通行もスムーズになった。歩道は三メートルの幅があつて



歩行者や自転車の通行も安全となり、敷き詰められたベージュ系の明るい色調の、モザイクのブロックは明るい印象を与える。特に自転車の多い古曾交差点から山大前までの約六百メートルには、二メートル幅の自転車レーンも設置されている。また街路樹として約九十本のケヤキの並木が続き、さらに四季折々の花が楽しめるように、低木としてサツキや寒ツバキ、ツツジなどが植えられている。さらに、大学正門前には花崗岩で囲んだ六百八十平方メートルの「街角広場」も設けられ、交差点の喧噪の中に静かな空間を創り出している。

このように、背景の緑の山や空などの自然とマッチして、「山大通り」は明るく、そして美しくなった。その緑たつぶりの街路樹を通して見る山大の建物もなにか快適そうにうつる。誰しもこの通りに安らぎを感じ、良い印象をもっていることだろう。並木を植えたことで落ち着きが出たこともその原因だが、なによりも電柱を除去したことで視覚的にも物理的にも空間にゆとりが生まれた。確かに「山大通り」は以前と比べて数段美しく、住みやすくなったと言える。しかしそこが単に美しいだけでは「山大通り」としての名前に値しないだろう。そこが真の「山大通り」となるためには、学生を含めた大学人の主体的な環境へのかかわりが必要であろう。ここが地域の人々と大学人とのコミュニケーションの場としての橋渡しとなれば、「開かれた大学」への道もそんなに困難ではなからう。

山口大学 人文学部 公開講演・講座

第七回公開講演

テーマ 「西欧文学の魅力をさぐる」
とき 平成六年七月九日(土)
ところ 山口大学学生会館
演題 「ウィーン世紀末の文学と芸術」
講師 人文学部 教授 岡光一浩
演題 「『ガリバー旅行記』のおもしろさ」
講師 山口大学名誉教授 和田敏英

平成六年度

山口大学人文学部公開講座

テーマ 「変革の時代」
「歴史を生きた人々」
期間 平成六年十月二十二日〜十一月二十六日の毎週土曜日(六回シリアルズ)
ところ 山口大学人文学部
日程・内容・担当講師
10月22日(第一回) 「張居正とその時代」 滝野正二郎 助教授
11月5日(第三回) 「ばさら大名」 佐々木導彦 森 茂暁 教授
11月12日(第四回) 「ポリシエブイキとメンシエヴィキ」
11月19日(第五回) 「ロシア革命再検討の一視角」 尼川 創二 教授
11月26日(第六回)

編集後記

・今、時刻は二十一時を回ったところで、研究室での住所確認作業は、もう六時間を越えました。うかつにも先生の手伝いを引き受けたところ、膨大な資料を提出され仰天、目の前が一瞬真っ暗になりました。しかし今、名簿のお名前を一人ずつ点検していくにつれ、広範囲にわたってご活躍の先輩の皆さんに、親愛にも似た感情をもつようになりました。山口大学とその周辺も随分変わったことがこの会報でもお分かりのことと思います。が、またこの会報は皆さんに、あの変わらぬ「古き良き時代」の甘くて苦い思いを彷彿とさせてくれるものでしょう。私たち三年生の前には厳しい就職難が待ち構えています。私たちに温かい春が来ることを願いつつ、この作業に愛着をもって取り組んでいます。(学生K・Y)
・忙しさにまぎれて後回しにしたツケがまたやってきました。早くから執筆の方には原稿をもらいながら、大変遅くなってしまう。また編集もままならないところが多く出ました。お詫び申し上げます。今回の会報も従来の構成とほとんど変わりませんが、「随想」と銘打って人文学部の先生に日ごろ考えておられることをエッセイ風に綴っていただきました。今後とも続ける予定ですので、ご期待下さい。大学は今年も忙しい年で、最も大きな変化は教養部の廃止と、一年生からの専門教育の導入が決まったことでしょうか。時代と共に、大学も大きな転換点に差しかかっています。この変革の風は来年も収まりそうにありません。新しき年も皆様にとりまして良い年でありますように。(K・O)